

## 文 献 紹 介

手塚 章 編：

### 『地理学の古典』

古今書院 1991年10月

四六判 422ページ 3,800円

久しぶりに「要するに」、「しかしながら」のない、日本文学的な表現の地理学古典翻訳に出会った。私的なことであるが、フンボルト流派の末端を濁していると自負している紹介者にとって、地理学の巨人といわれ、取っ付きの悪いイメージが先行しているフンボルトと、哲学的な言い回しで行間を読む努力を必要とするリッターに、時を同じく会うこと（再会）ができた喜びは、限りのないものである。

フンボルトやリッターの原典に果敢に挑戦した先人、学徒は多いと思う。しかし、小生と同程度と思うのは失礼千万なことではあるが、志を中途にて挫折し、原典を書棚に戻ってしまった学徒も多かったのではないか。

フンボルトとリッターといえば、地理学を学ぶ初期の段階で知り得る人名であるが、知名度が高い割には、その著作が一般に読まれていない学者であるといえる。これについては、本書でも、序「地理学の革新と伝統」に、「彼ら2人の活躍したのが19世紀の前半であるのに対して、わが国では明治期になってから西欧の学問や思想が初めて本格的に導入されたという事情である。したがって、彼らと時代を共有する地理学者は日本に存在しなかった。ヘットナーやシュリューターの著作が、複数の地理学者によって翻訳あるいは抄訳された事実と、このことは対応しているように思う。」(112～113頁)と記しているように、第1の原因は、時の巡り合わせではなからうか。さらには、先述のごとく、巨人であるが由に、大著が多く、翻訳に手頃な著作がなかったフンボルトと、地理学の本質や方法についての体系的な著作を多く持つが、難解な文体を操るリッターの、それぞれの持ち味が第2の原因であろう。

今回、この2人の日本語訳を、彼らの時代から1世紀半を経過した今日、はじめて体系的に発表したことは、19世紀ドイツ地理学の啓蒙の先駆けとして、大いに評価できる。

本書は、第一部「地理学理念の確立」、第二部「地理学理念の展開」、第三部「地理学思想の流れ」の三

部作である。まず第一部は、フンボルト「植物地理学試論」、「自然的世界誌の考察範囲と科学的考察方法」とリッター「一般比較地理学の試みへの序説」、「地理学における歴史的要素」の各2著作の方法論に関する部分が収録されている。

フンボルトの地理学の本質や方法に関する文章はきわめて少なく、編者の記しているように、この2編がフンボルト地理学の思想把握に大いに役立つであろう。欲を申すならば、編者が「あとがき」で記している『自然の姿』に収められている「ステップと砂漠」を、明解な日本語訳で紹介していただきかった。フンボルトの「自然的世界誌の考察範囲と科学的考察方法」では、世界に関する一般法則探求の序論的考察、コスモス概念である自然全体観の段階的發展と拡大について、明確で系統的な翻訳がなされており、フンボルトの地理思想を読者に理解させるのに十分な説得力がある。リッターの「一般比較地理学の試みへの序説」の翻訳は、紹介者の独語力をあらためて認識させるのに充分であったほどの明解な訳である。

さて、本書には、フンボルトとリッターの他に、第二部「地理学理念の展開」に、ヘットナー『地理学の本質と課題』、およびシュリューター『人文地理学の目標』が収録されている。この2編の文献解題に続く、解説「ドイツ地理学におけるラントシャット論の展開」は、1970年代から活発に論議されてきた「いわゆる景観」の解釈の整理に、誠に都合のよい内容である。とくに、ヘットナーとシュリューターのラントシャット概念の相違と批判の紹介は、先の文献解題の内容を、より鮮明な形で読者に伝えるであろう。

第三部「地理学思想の流れ」には、ヘットナー「19世紀における地理学の発達」、マルトヌ「地理学の歴史」が収められている。その解説「19世紀の地理学思想史に関するいくつかの見解」は、「ヘットナーとリヒトホーフエン」、「レーリーとハーツホーン」、「シェーファーとハーツホーン」というように、それぞれの地理学観を相対的に対比させて、具体的に解釈検討を加えている。この解説は、編者の地理学観の一端を見ることができ、非常に興味深い部分である。

なお、第二部「地理学理念の展開」において、ヘットナーとシュリューターの地理学思想の根幹を翻訳しているのであるが、この翻訳は、編者が自信をもって「新訳」というだけあって、先人、学徒による従来の翻訳、抄訳と比較すると、本書の翻訳のもつ文脈の流れのよさに敬服するのみである。とくに、ヘットナー「地理学の本質と課題」の「地表に関するコロロジ－的科學としての地理学」(180～198頁) (より詳しくいえば、「地理学における自然と人間」(185～189頁)と「空間科學としての地理学、景観科學としての地理学」(189～192頁)の2項)は、じっくり読み込む価値が充分にある。

全編を通じて、編者の地理学観がひしひしと押し寄せてくる迫力がある。「フンボルトにせよリッターにせよ、原典を日本語で読めないことが、わが国の地理学史研究を底の浅いものになっていることは否定できない。とりわけ、「計量革命」以降における英語

文献万能の風潮は、われわれを地理学の古典からますます遠ざけている。……近代地理学の歴史についてバランスのとれた判断材料を提供するためにも、原典の訳出がさらに積み重ねられることが望ましい。」

(113～114頁)は、まさに編者の心根であろう。一人一人が原典にあたって学ぶことも大切であろうが、それは「日本における原典の広範な理解(普及)」には結びつかない。やはり、編者の主張のように、多くの翻訳本が出現することが必要なのであろう。それらが蓄積されることによって、はじめて「入門部門」と思われている抄訳や「さわり」を抜粋したアンソロジーが重要な意味をもつことになるのである。

本書は、日本の地理学史研究に新しい一ページを加えた成果物として大いに評価できる。多くの地理学徒に読んでほしい一冊である。

(佐野 充)